

# 中皮腫向け遺伝子治療

## 医薬基盤研・阪大 マウスで効果確認

医薬基盤研究所と大阪大学のグループは12日、アスベスト(石綿)などが原因で発症するがんである「悪性胸膜中皮腫」向けに新たな治療法を開発し、動物実験で効果を確かめたと発表した。が

んを抑える遺伝子を胸腔(きょうくう)内に導入し、増殖を止める。今後、阪大などで臨床研究を実施する計画で、10年以内の実用化を目指す。

創薬基盤研部長と阪大の水口裕之教授らの成果で、欧州がん学会誌(電子版)に掲載された。研究チームは、細胞内で様々な情報伝達を抑える「SOCS3」という遺伝子が、細胞増殖を抑えるだけでなく、がん抑

制遺伝子のp53の量を増やすことも見つけた。胸腔内に中皮腫細胞を植えたマウスで実験した。アデノウイルスをベクター(遺伝子の運び手)に使い、SOCS3を中皮腫細胞に遺伝子導入したところ、がん増殖が抑制できた。通常なら50日以内に死亡するマウスが、生存期間が1年以上延びたという。

SOCS3は様々な情報伝達を抑えるが、遺伝子は胸腔内だけに投与するので、副作用は起こりにくいという。今後、安全性を確認したうえで、倫理委員会で承認されれば、阪大や大阪府立呼吸器・アレルギー医療センターで臨床研究を始めた考えだ。

アデノウイルスを使い、ソナーフェロンを導入する遺伝子治療の臨床研究が既に実施されており、アデノウイルスの安全性は高いとみている。中皮腫はアスベストを吸い込んでから30〜40年後に発症する。年間の死亡者は1000人を超え、増加傾向にある。抗がん剤などで治療するが根治は難しい。

米国では中皮腫向けに